グローバルリテラシーを測る新しいテストの開発

～グローバル社会を生き抜く人材育成に向けて～

○長谷川康代*，○山田剛史**

(株)ベネッセコーポレーション高校事業部*，岡山大学大学院教育学研究科**

テスト開発の背景

中央教育審議会(2014)は，「生産年齢人口の急減，労働生産性の低迷，グローバル化・多極化の荒波に挟まれた厳しい時代を迎えている我が国においても，世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く，将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。そうした変化の中で，これまでと同じ教育を続けているだけでは，これからの時代に通用する力を子供たちに育むことはできない。この厳しい時代を乗り越え，子供や孫の世代に至る国民と我が国が，希望に満ちた未来を歩めるようにするため，国は，新たな時代を見据えた教育改革を「待ったなし」で進めなければならない」と述べている。グローバル化が急速に加速する社会では，答えが分かっていない問題や，正解が 1 つではない地球規模の諸問題に対して，自分とは異なる価値観の異なる他者と一緒に協働して問題の解決に取り組んでいく力が必要となる。そういった社会の中で求められる能力を，グローバルリテラシーと呼び,「英語力以外の国際的な素養」と定義することにする。ベネッセコーポレーションでは，こうした時代の要請に応えるべく，グローバルリテラシー測定するための新しいテスト（グローバルリテラシー&スキルテスト（仮称））の研究開発を行っている。

テストのコンセプト

グローバルリテラシー&スキルテスト（**Global Literacy & Skills Test**，仮称，以下，GLS テストと略す）では，主たる測定対象として高校生，特に，スーパーグローバルハイスクール指定校（Super Global High school，以下，SGH 校と略す）のような，学力のレベルの高い高校の生徒を想定している。高校の先生にとっては，SGH のお取り組みで実施された，課題研究や海外研修などの様々な教育活動の指導効果測定に利用できるテストとなること，高校生にとっては，従来の教科学力とは異なる観点で自分自身の強みや特徴とその成長が分かり,学びへの意欲が湧くことを狙いとしている。しかし，高校生だけではなく，大学生・社会人も測定対象として，幅広い年齢集団を対象としたテストとしての可能性も感じている。GLS テストの特徴として，以下の 3 点をあげることができる。

1. 英語力以外の国際的な素養を客観的に測ることを狙った出題。
2. 国際標準を視野に入れており，英語版のテストフォームを用意。
3. 高校生，大学生，社会人を対象にすることで，様々な立場や環境の人と比較ができる。これにより，自身の強み・特徴が分かる。

テストの構成とテスト形式

SGH 校は,「現代社会に対する関心と深い教養に加え,コミュニケーション能力,問題解決力等の国際的素養を身に付け，将来，国際的に活躍できるグローバル・リーダーを育成する」（文部科学省初等中等教育局, 2014）ことを目指して，平成 26 年度より実施された事業である。GLS テストは，SGH のプログラムにより育成されることが期待される 3 領域（1.国際的素養としての基礎的・汎用的能

力，2.社会・国際問題に対する関心・態度，3.幅広い教科知識とその活用力）のうち，前者 2 領域の測定を意図して構成されている。3 つめの「幅広い教科知識とその活用力」は従来からある模試や英語テスト（GTEC など）を利用して測定される。

テストは，「選択・記述式」，「論述式」，「アンケート」から構成される。「選択・記述式」テストと「論述式」テストの実施時間は 45 分程度である。「アンケート」の回答時間は 15 分である。さらに，オプションとして「パフォーマンス課題」を用意する。これは探究心・創造力を測定するテストで，テスト会場で制限時間内に解答するものではなく，自宅課題として用意される。受検者は与えられた課題に 1〜2 週間かけて，インタビュー，インターネット，文献などの各種情報源を活用して取り組むタイプのテストとなる。

「選択・記述式」テストでは，実社会のテーマや課題に対して，情報を読み取り，問題の発見・解決力を問う問題を出題する。例えば，あるグラフが提示され，そのグラフから読み取った事柄が示される。読み取った事柄が，グラフの内容から正しいと言えるか，誤りと言えるか，あるいは，グラフの内容だけでは真偽を判断できないか，を答えさせる問題などが計画されている。

「論述式」テストでは，グローバルな実社会で起こりうるテーマや課題に対して，自分とは価値観の異なる他者と協働して問題を解決していく力を問う問題を出題する。例えば，ある企業で日常的に生じている問題を解決するために，3 つのプランが提案されたとする。この中から最も優れたプランとそれが優れていることの理由を，3 つのプランそれぞれの利点と難点を勘案した上で解答させる問題などが計画されている。

「アンケート」は，グローバル・リーダーに必要な姿勢・意欲・態度などを問うものである。アンケートを通して，受検者自身が振り返り，自分の体験や行動を意味づけする機会としてもらうことを意図している。

テスト得点の評価

「選択・記述式」テストの評価には，項目反応理論（Item Response Theory: IRT）を用いることが検討されている。IRT を活用することで，テスト得点の等化を行い，異なる受験回のテスト結果を相互に比較できるようにすることが可能になる。本テストは，中学生・高校生から，大学生，社会人まで幅広い年齢集団を測定対象としている。このため，対象となる年齢集団ごとに難易度の異なるテストフォームが準備される予定である。つまり，同じ難易度の異なる実施回についてのテストフォームの等化（水平等化）と，異なる難易度のテストフォームについての等化（垂直等化）とが，検討されることになる。「論述式」テスト及び「パフォーマンス課題」テストは，ルーブリックに基づく評価が行われる予定である。

引用文献

中央教育審議会(2014). 新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について（答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm (2015 年 7 月 15 日閲覧)
文部科学省初等中等教育局(2014). 平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール公募要領
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/01/30/1343302_07.pdf (2015 年 7 月 15 日閲覧)